



Title	戦後における服飾をめぐる言説・実践に見る「日本らしさ」と戦前：中原淳一と花森安治を例に
Author(s)	安城, 寿子
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 116-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53563
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

戦後における服飾をめぐる言説・実践に見る「日本らしさ」と戦前

— 中原淳一と花森安治を例に —

安城寿子／お茶の水女子大学大学院

1940年代末から50年代初頭、つまり「戦後」という時間の始まりにおいて、活字メディアでは、和服を日本人の美意識の原点として懐かしむ言説が急速な台頭を見せた。同時にそこでは、「日本らしい」衣服文化を創り出すため、「和服的」要素を洋服に取り入れたり、逆に、和服の形態にアレンジを加えることで新たな息吹をそれに与えようとするなど、様々な試みが行われていった。本発表の主たる関心は、こうした言説や実践が、戦前までのそれとどのような関係に立つものなのかということにある。なぜなら、これら二つの時間における服飾をめぐる言説と実践の間にどのような断絶があり、またどのような連続性が見られるかということは、従来の服飾研究でいまだ十分な検討が加えられていない問いだからだ。

こうした問題意識に基づき、本発表では、まず、服飾における「日本らしさ」の観念や和服というものを取り巻く昭和戦前期までの状況がどのようなものであったのかを概観していく。その上で、戦後のご意見番として多くの媒体で服飾をめぐる言葉を語り、服飾デザインをも手がけた中原淳一と花森安治に光をあて、そこに見られる断絶と連続とを明らかにしていきたい。

多くの先行研究に明らかのように、明治から昭和戦前期にかけて展開された服飾をめぐる議論と実践は、それぞれの時期によって異なる背景を持っている。しかし、そこには、以下に述べるような感覚と観念の連続性を見出すこともできる。

第一に挙げるべきは、現行の和服を非機能

的な衣服として否定的にとらえる感覚である。女性服飾への洋装導入が問題となった明治十年代末から婦人標準服の選定が急がれた昭和十年代に至るまでの多くの資料において、和服は、歩行を妨げる裾に長い袖、重い帯という三点から特徴付けられ、日常生活に不向きな衣服として語られている。注目すべきは、こうした感覚が和服擁護論者によってすら共有されたものであったということなのだが、それゆえ、一方では洋服の普及の必要が叫ばれ、また一方では和服でも洋服でもない第三の衣服の創造が求められたのである。その際、日本人が立ち返るべき「真の伝統」として参照されたのが衣と裳から成る上古の服飾であったことは、既に指摘されている通りである。この上古服飾の観念は、「皇后思召書」(明治20年)に代表されるように、当初、洋装採用を正当化するための建前として引き合いに出されるに過ぎなかった。しかし、たとえば太平洋戦争の開戦直前に、古墳出土の埴輪から着想を得た衣服が製作されたように、しばしばそれ自体がデザインのモデルとして顧みられたことは、注目に値する。こうした上古服飾の観念が、当時の人々の間でどれだけ一般的なものとして認知されていたかは、果たして疑問である。それでも、近代の日本における「伝統」「原点」の表象として、上古服飾というものが一定の連続性とともに関わり現れていたということは、議論を待たないだろう。ここでは少なくとも、そのことを強調しておきたい。

ところで、こうした感覚や観念が、近代という時間の流れの中で途絶えることなく姿を

現すのに対し、昭和初期のほんの一瞬試みられようとしたものがあつた。それは、欧米モードに受動的な洋裁家たちの態度を正し、「日本独自の洋服文化」を創出しようとする試みである。こうした動向は、アメリカ、フランスといったモードの原産国を敵に回しての戦いが今しも始められようとしていた時局とも関係するものであつたが、戦局の悪化に伴い、具体化を見ないまま立ち消える運命にあつた。

さて、こうした過去の延長にある戦後という時間の始まりにおいて、中原淳一と花森安治はそれぞれに雑誌を創刊し、日本人の衣生活のあるべき姿を模索していった。

1946年に雑誌『それいゆ』を創刊した中原淳一が最も重視したのは、「工夫」による「美しさ」の実現である。それは当初、物資欠乏ゆえの課題として取り組まれたが、やがて流入する欧米モードに追従することない「日本独自の洋服文化」の形成という目的のために重んじられるようになる。もともと、中原は、時代の美意識の表出としての意義をモードに見出しており、彼自身も同時代のパリモードを彷彿とさせるデザイン画を多く残していることから、ここに中原の矛盾を指摘すべきかも知れない。こうした状況にあって、中原は、モードに煩わされずに日本人が楽しめる領域として、和服を顧みるようになる。中原はしかし、従来通りの和服の継承を唱えていたわけではない。彼は、戦後の衣生活があくまで洋服中心のものであるべきという考えから、和服もまた「洋服の感覚」でまとわれるべきだと主張していた。こうした思想に基づき、中原は「洋服のように」色彩と線の整理に基づく和装を奨め、また一方で、パッチワークやアップリケなど、洋服の技巧の和服への採用を試みたのである。

一方、1948年に雑誌『美しい暮しの手帖』

を創刊した花森安治もまた、モードの模倣を批判し、日本人にふさわしい衣服文化形成の必要を叫んでいた。そこで花森が拠り所としたものもまた「和服的なもの」であつたのだが、彼は「洋服的な和装」を提案した中原とは対照的に、「和服的な洋装」を推奨した。和裁の知識だけで製作可能な洋服パターンの考案や、銘仙・紬といった和服生地洋服への採用は、その一例と言える。ここで留意すべきは、こうして日本人の衣生活の原点を和服に求めた花森もまた、従来通りの和服の継承に否定的であつたことだ。和服は封建社会の遺物であるという理由から、和服そのものでなく、あくまで「和服的なもの」に価値を見出そうとしたところに、花森の思想の特徴を指摘することができよう。

こうして昭和戦前期までと戦後における服飾をめぐる言説・実践を眺めた時に気づかされるのは、冒頭で述べた通り、和服や「和服的なもの」を服飾における「日本らしさ」を代表するものとして重んじる感覚が、戦後にわかに台頭を見せていることだ。そこからは、和服を非機能的なものとして改善の必要を叫ぶ声も、もう一つの「伝統」「原点」の表象としての上古服飾の観念も、姿を消している。戦前においても、和服美を礼賛する言説は存在したが、それは、ただ一つの拠り所として和服を愛しむものであつたとは言えない。

しかしながら、これら二つの時間における服飾をめぐる言葉と試みとは、ただ断絶の関係によって捉えられるべきものではない。「日本人らしい」衣服文化、そして「日本独自の洋服文化」の創出という理想は、戦前から戦後へと引き継がれ、再び試行錯誤が行われたからだ。「日本人」と「衣服」の問題を解決し、その理想的完成に至ろうとする道程は、戦後再び歩みなおされたのである。